

商業集積と地域の連携事例

大阪産業経済リサーチセンター
主任研究員 竹原 康幸

はじめに

近年、商店街等の商業集積において、地域の事業者や住民、学校等と連携して、地域や商業集積を活性化させる動きが見られます。しかし、長続きせずに自然消滅する例も少なくありません。そこで、今後の連携事業に資することを目的として、連携の継続要因等を探った『商業集積と地域の連携事例』をとりまとめました。

報告書で取り上げた7事例のうち、今回は、製造業者も参加している1事例を詳しく、残り6事例は概要を紹介し、継続要因等をまとめとして記載します。

目を輝かせた子どもたちが集まる“とんだ和っかデイ”

★事業（連携）開始の経緯

高槻市富田町には、JRと阪急の2つの駅があります。両駅の北側に大型店舗が立地し、南側には古くからの街並みや酒蔵、寺社などが残る一方、専門店も数多く立地する商業集積地となっています。事業者には地元の人が多いのですが、富田町出身ではない事業者が「居心地が良い」と評しているなど、外からの人を受け入れる温かさも持ち合わせた独特の雰囲気のある町です。また、後継者や新規開業者など若い人が多いことも特徴としてあげられます。

「とんだ和っかプロジェクト」は、富田町で生まれ育ったある商店主が子どもの姿を見かけることが少なくなったことを危惧したことを契機に動き始めました。「職業体験を通じて、町やお店に親しみを感じてもらうとともに、店主も地元の人と一緒に富田に暮らす楽しさ、快適さを発展させ、将来、子どもたちに自信を持って手渡せる豊かなまちにしたい」、「子どもたちが大人になっても、ずっとこの町で暮らし続けて欲しい」との思いで構想を練り、平成24年7月に12店舗等が参加した「とんだ和っかデイ」を開催しました。当初の運営メンバーは3名でしたが、前例のない試みで手探りのなか、小学校の門前でチラシを配布するなど、苦労を重ねました。その甲斐もあり、予

定数以上の希望者が出る勢いとなり、最終的に200人の子どもが体験しました。

小学校の校長先生の助言もあり、第2回（平成25年2月）からは高槻市教育委員会の後援を得て小学校経由の案内が可能になり、他の都市で地域活性化に関わっている人が運営に参画するなど、運営体制がより強固になりました。

富田町以外の店舗からの参加希望や事業運営に組合が加わった効果もあり、平成27年11月に開催した第5回には、第1回の倍以上にあたる29の店舗や寺社などの協力を得ることができました。内訳としては、ケーキや和菓子、ピザなどの食物、コーヒーやオリジナルジュースなどの飲料を作る飲食系、ナップザックやブーケなどを作る創作系、寺や神社、歯科での体験系と様々なプログラムがあり、各グループから1つずつの3種類の体験ができます。

★連携における工夫・成功要因

① 地域をあげて参加

富田町は、歴史的な趣きを感じられる地域です。こうした地域特性もあって、地元に対する愛情、子どもに対する関心も高い地域であり、商店や飲食店に限らず、銀行や郵便局、寺や神社、歯科、消防団など、地域には欠かせない多岐にわたる分野からの参加が得られています。

有志の思いから始まったことで、金銭的な話に終始することなく、共感する事業者を募ることができ、「とんだ和っかデイ」が、ある程度軌道に乗った段階で、組合が運営に関わったことで、広域的に展開している事業者が参加しやすくなったとのことです。

② 参加店舗等も楽しんで活動

当日は、教える側の大人が生き生きと楽しそうに説明しているのが印象的でした。最も得意とし、誇りとしている自らの仕事を、子どもたちに教える機会は、大人にとっても楽しいものであり、「自分ごと」として参加できています。日々淡々と行っていた仕事に対して、子どもたちが目を輝かせて説明を聞き、体験している様子を見ることが、新たな発見、日々のやりがいにつながるという声も出ています。

③ 参加できなかった子どもにも留意するなど、運営に工夫

チケット販売時には、朝早くから長い行列ができていたことを踏まえ、第5回は、事前に希望を募り、抽選のうえ、当選者にチケットを販売するように変更して、参加希望者やその親の負担軽減を図りました。さらに、当選しなかった子どもには、返信はがきと駄菓子100円分を引き換える、「お仕事探検ツアー」を開催するなど、皆が何らかの形で「とんだ和っかディ」を楽しめるよう工夫をこらしています。

参加希望事業者に体験プログラムを提案するなど、参加店舗等を広げる工夫もしています。

★今後の方向性

当連携に学んだ人たちが伊丹市で同様の事業を行うなど、新たな動きもみられます。富田町の全ての店舗等で体験できる、町全体での取組になるのが理想とのことでした。

子どもたちの真剣なまなざしや体験前の緊張した面持ち、体験後の誇らしげな笑顔を見ていると、「とんだ和っかディ」が、地域、商店街、子どもをつなぐ、しっかりとした大きな輪となっていくのは確かなように思われます。



<歯の治療体験>

その他の掲載事例

繁栄商店街（大阪市港区）では、商業機能の強化を図るとともに、「昔の市場（いちば）の雰囲気再現できれば…」と、毎月第一土曜日に、商店街の外から出店者を集めて、「繁栄ワイワイ市場」を開催しています。

小松商店街（大阪市東淀川区）では、原則偶数月の第四土曜日に「物産市&フリマ」を開催、商店街・地域の活性化を図っています。この取組を続けていくなかで、地元の若手グループが「小松

オンステージ」を運営するようになるなど、イベント内容が広がっています。

宮之阪中央商店街（枚方市）では、組合役員のネットワーク、地域との関係などを活かし、「宮之阪七夕まつり」、「みやのさかた市」、「宮之阪サポーター制度」など、様々な事業を展開しています。連携により、商店街単独ではできないことにも取り組んでいます。

駒川駅前商店街（大阪市東住吉区）は、諸団体と連携し、なにわの伝統野菜「田辺大根」を活用した、地域との長期にわたる関係作りを行っています。収穫後の12月に開催されている「田辺大根フェスタ」は、平成27年で19回目となりました。

橋波商店連合会（守口市）は、地域と一体となった協議会を設立し、地域の意見や提案を積極的に吸い上げ、実行に移しており、今昔の写真を集めた「守口はしば歴史展覧会」を開催するなど、商店街のみならず、地域の活性化に取り組んでいます。

大阪商業大学横見ゼミナールでは、四條畷市の観光振興、商店街活性化を目的としたハイキングを企画・運営しています。ハイキングコースでの四條畷商店会等の逸品の試食、商店街のレシート提示で参加できる抽選会等で、商店街での購買を促進しています。

事例からみえてくる継続要因、工夫

共通した要因として、①地域に対する愛情、②小さく始めて大きな事業に、③お金をかけず、手間をかける（創意工夫）、④連携相手を尊重、⑤デジタル・アナログ両面での情報受発信の5点あげられます。これらは、企業間連携にも当てはまる面もありそうです。

おわりに

自分の住んでいる、働いている地域を活性化させたい方、地域貢献したい方、あるいは、連携相手や連携のコツを探している方は、身近な商業集積に足を運んでみてはいかがでしょうか。新たな出会い、発見があるかもしれません。

この報告書は、当センターが実施した他の調査結果とともに、当センターのウェブサイトでご覧いただけます。

<http://www.pref.osaka.lg.jp/aid/sangyou/>